

不百里 養老



養老小學校 編

「ふる里養老」によせて

校長 久保田 正 剛

わたしたちの住む養老小校下には
いくつものすぐれた昔話が史実とし
て残されています。それをもっともつ
と大勢の皆さんに知ってもらうため
に、養老小ふるさと委員会の皆さん
が、根気よく時間をかけて資料を集
め、その中から代表的な話を一冊の
本にまとめていただきました。

ふる里養老を知る上でも、また、
調べ学習の資料としても十分活用で
きるものばかりです。中に収められ

ているものは、史実として実際に有つ
た事柄や、伝説とし語り続けられて
来たもの、そして史実に基づいた
「地名」の由来など、どれも興味・
関心をそそるものばかりです。

なかでも、興味深いところは、ど
うして「養老」という地名になった
かというところ です。そのことにま
つわる「孝子物語」は全国津々浦々
にまで知れ渡っているお話です。

また、日本武尊ヤマトタケルが今から約千五百
年も前にこの地を通って故郷大和
(今の奈良県)へ帰っていかれ、そ
れにまつわるエピソードも、大変に
興味深いところです。

このようなすばらしい昔話が残されている養老小校下、住んでいてよかったことの誇りと実感を是非味わって欲しいものです。

最後に、この編集に当たっていただいたふるさと委員会の皆さん、本当にご苦労さまでした。そして、直接ご指導いただいた養老町文化財保護審議会々長田中育次先生、全面的にご指導、ご支援をいただいた町教育委員会に対し厚く御礼申し上げます。

目次

養老という年号のいわれ	1
孝子物語	4
養老美泉をめぐる大論争	
養老滝？ それとも菊水泉？	6
地名の由来（一）	
柏尾	9
柏尾の金鶏	10
地名の由来（二）	
龍泉寺	12
庚申待	13
山猫のお六	16
袖とり宮	19

地名の由来 (三)

明 徳……………21

専念寺の阿弥陀像……………22

姥 石……………24

地名の由来 (四)

五日市……………27

沢田の久々美雄彦神社……………28

勢至の鉄座……………35

勢至の一つ火……………38

上方 白鳥神社の神宿……………41

養老山の龍のお遊び……………45

京ヶ脇の口碑・伝説……………48

養老という年号のいわれ

今をさかのぼること、千三百年も昔の話となります。

六七二年美濃国関ヶ原において天皇の位の継承をめぐり、大友皇子（天智天皇の子）と大海人皇子（同天皇の弟）との間で激しい戦いが繰広げられました。世にいう壬申の乱です。美濃の豪族達は大海人側に加担、よく皇子を助け勝利へと導きました。はれて大海人皇子は天皇として政治を司る地位を得、戦後も美濃国は天皇家にとって大切な地域となった

のです。

それから四十年の歳月をへだてて天武天皇の孫にあたる元正女帝が、霊龜三年（七一一）美濃に行幸されました。行幸とは天皇が旅することをいいます。

元正天皇の時代には、政権も確立し、国も治まり安定してきました。天皇は、壬申の乱に天武天皇を助けて戦い、政権の基盤となつている美濃国の豪族や住民に直接労をねぎらい、その功績を表彰したいと望まれました。同時に、朝廷と美濃国とのさらに強い結びつきを念願されたのでしょう。行幸は、政権の確立を広

く誇示^{こじ}するための大デモンストレーション^{シヨンヨン}でした。

九月十一日平城京を出発し、十八日不破^{あんぐら}の行宮に到着した天皇は長旅の疲れ^{つか}をいとわず、二十日当耆郡^{たぎ}（養老郡）多度山（養老山系）の美泉^{らん}をご覧になられました。

天皇は都

へお帰りに

なると、十一月十七日に、

「私は多度山の美泉で手や顔を洗ったが、皮膚はなめらかになり、痛むところも治ってしまった。また、こ



元正天皇行宮址

の水を飲んだり浴みした者は、白髪が黒くかわり、うすい髪も新しく生えてきた。目の見えなかった人もはっきり見えるようになり、その他の病も全て治ってしまった。

このように美泉は病を治すのに大変よく効き、老を養うのにこの上もない薬である。この美泉が出たことは、この上もなくめでたいことであるから、年号を養老と改める。

また、全国の八十歳以上の者に、絹、綿、布、粟などを給与し、親孝行の者を表彰せよ。独り暮らしで困っている者には、救いの手をさしのべよ。」などと仰せられ、福祉行^{ふくし}

政に尽力じんりよくされました（続日本紀しよくにほんぎに拠る。）

ところが天皇は翌年二月、半年の間もおかず再度この地に行幸きんぎょうされているのです。よほど美泉を気に入られたのでしようが、生涯しょうがいことく孤独の女帝は壬申の乱の立役者である、祖父天武帝の足跡そくせきをたどり、次第に追慕ついきほの念をつのらせていたとも考えられます。もしそうであるならば養老の山なみからわきでた水は、天皇の心の傷をいやしていたのかもしれない。

柏尾廃寺からさらに東海自然歩道の山道を登りつめていくと、訪れる人もめったにいない秣滝まぐさのあるのを



秣 滝

知っていますか。元正天皇が養老行幸のおり、馬に与える水を汲んだと言ひ伝えられる滝です。うっそうと草木の生い茂るなかに流れおちる水の音が、当時の出来事をひそかに語りかけてくれるような気がします。

元正天皇につづき、聖武天皇もまた七四〇年養老に行幸きんぎょうされています。

孝子物語

養老の滝がお酒になったという孝行息子（源丞内^{げんじょうない}）のお話は、あまりにも有名で誰もが知っています。では、このお話はどのようにして生まれたのでしょうか。

元正天皇が靈龜^{れいき}三年九月二十日に養老に行幸され、多度山（養老山）の美泉をご覧^{らん}になったおりに、このような美泉がでたことは、この上もないめでたいことだとおよろこびになりました。年号を「養老」とお改めになりました。このことがもとになって、

「養老孝子」のお話が生まれたのです。

「養老孝子」のお話で一番もとなつた「十訓抄^{じっくんしょう}」には次のように書かれています。

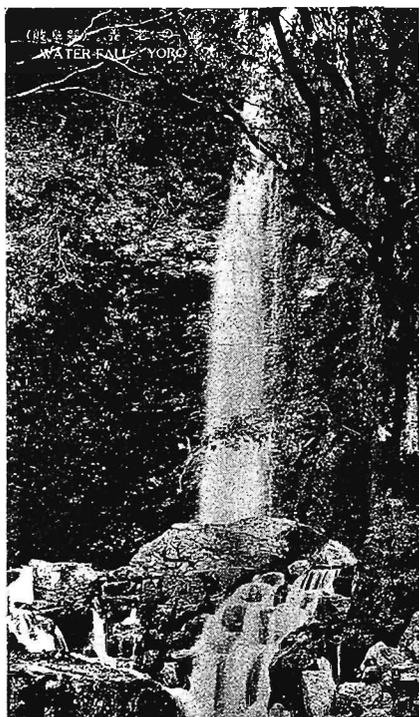
昔、元正天皇の御時、美濃国に貧しい男がありました。この男は山の草木をとって、それを売って年とつた父を養っていました。この父は、たいへんお酒が好きで朝夕お酒をほしがつたので、この男は「ひょうたん」を腰につけていてお酒を買って父に飲ませて、よろこばせていました。ある時、山に入ってたき木をとろうとしたところ、こけの生えた石

にすべって、うつぶせにころんでしまいました。酒のにおいがしたので、ふしぎなことだと思つてあたりを見まわすと、石の中から水が流れ出ていて、その色はお酒に似ていました。汲んでなめてみるとたいへんおいしいお酒でした。よろこんで、そののち毎日これをひょうたんに入れて持ち帰り、よろこばせていました。この事をお聞きになつた天皇は、霊亀三年九月、このところに行幸になつて、そのお酒の出る所をごらんになりました。

そして、「これはこの男がたいへん親孝行だから、神さまがおほめに

なつて、お酒をあたえてくださったのだらう。」とおっしゃつて、この男を美濃守という役人になさいました。そのお酒の出る所を「養老の滝」と名付け、また十一月年号を「養老」とお改めになりました。

「十訓抄」に養老考子のお話が紹介されたことにより、全国的に広まり今のように有名になつたとのことです。



養老の滝

養老美泉をめぐる大論争

養老滝？ それとも菊水泉？

元正天皇につづき、東大寺建立こんりゆうに
尽す聖武天皇もまた七四〇年養老を
行幸をされています。相つぐ帝の行
幸は、いやが上にも養老美泉の噂うわさを
広く伝播でんぱさせる効果があったのでな
いでしょうか。

聖武帝に随ずい行こうした大伴宿祢東人は、
「古いにしえゆ 人の言いける老人おいびとの 変
若つとら水ぞ 名に負う滝の瀬

——昔の人が語りつぐ老人の若がえ
るといふ水は、養老という名の

とおりの滝の流れであるよ」

と詠み、また繊細優美せんさいゆうびの歌人として
知られる大伴家持やかもちは、

「田跡たど河の 滝を清みか 古いにしえゆ

宮仕えけん 多芸たぎの野の上に

——田跡河の滝が清らかだったので、
昔から行宮あんぐうを造ってお仕えして
きたのだらう。田芸の野のほと
りに」

と詠みました。ともに万葉集巻六に
収録され、歌碑を養老公園千歳楼に
見ることができます。

ところで大きく時をへだてた江戸
時代末、養老美泉のありかをめぐつ
て、養老滝を主張する田中大秀たいしゅうと菊

水泉をとる秦鼎はたかなえとの間で、激しい大論争が巻き起こりました。

田中大秀は飛驒ひだ高山生まれ、本居もとおり宣長のりながに国学を学び歌道にもすぐれた人で、一八一四年（文化一一）養老滝説を骨子こっしとする「養老美泉辯註」びせんべんを書きあげます。翌文化一二年自論の正当を世間に認めさせるべく大秀は、初めて養老の地を訪れ滝を観た後、滝壺のほとりに養老美泉辯碑を建てました

一方、尾張藩おわりの儒臣じゅしんであった秦鼎は、孝子伝説の酒のわきでた泉を菊のかおりたつ菊水泉と、考えていました。大秀に負けてはならじとばかり

り、鼎は文化一三年かねて名古屋の石材店に製作させておいた碑石を菊水泉にまで運び、盛大に詩宴を催したのです。これが菊水銘碑です。

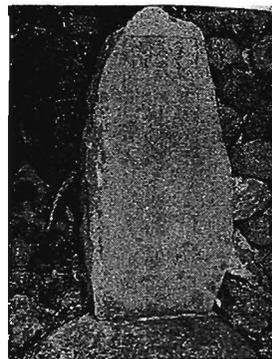
当時、高田に住む早野有章ゆうしやうは、

田中大秀から国学を、秦鼎から漢学を学び、兩人を師と仰ぐ人でしたので論争の板ばさみになりたいへん苦しみました。彼のもとには、

「自分の学説を信じ味方するよう」



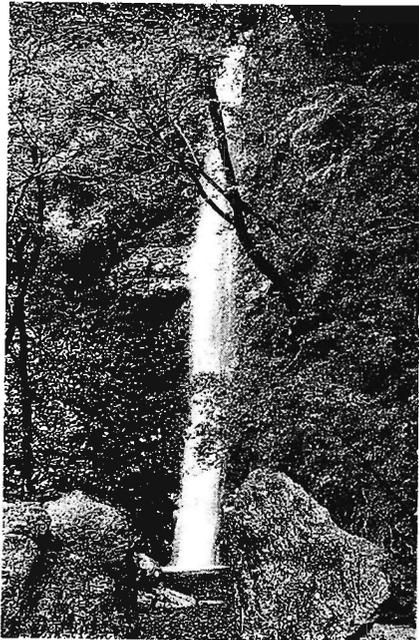
菊水銘碑



養老美泉辯碑

という二人からの手紙が届き、今も大切に保管されています。

お互い意地のはり合いとなった論争でしたが、このおはなしにはまだまだ尾ひれがついています。田中大秀が七十一歳でこの世を去ると、秦鼎の門人達は名古屋にあった大秀の「養老美泉辯註」の版木をそんしょう損傷。それでも腹の虫はおさまらなかつたらしく、ついに養老滝畔の美泉辯碑をたたきこわしてしまいました。現在の碑は、大秀の流れを汲む人達が明治三十一年に再建したものです。



養老の滝



掬水泉

地名の由来（一）

かしわ
柏尾お

むかしむかしのことであった。ひとりの坊さんが、大悲観音の像をかっいで山路をひよろりひよろりと歩いてた。そのうち、歩きつかれたのたろう。坊さんは、大きな石の上に観音さまを置いて、いっぷくしよらとしたが、

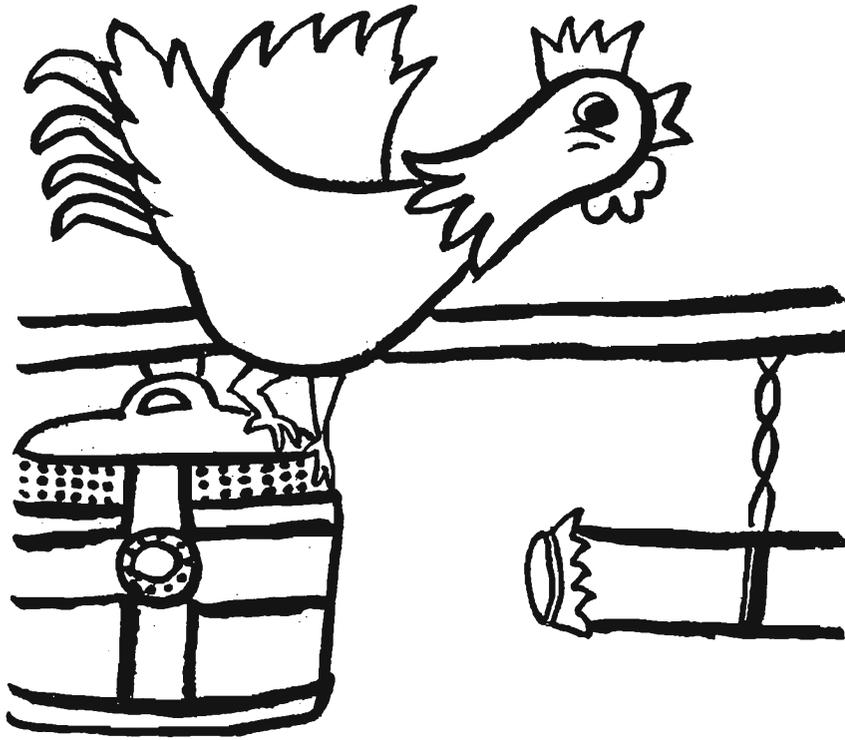
「このままではもったいたない。なにが敷くものはないか」とおもって、あたりを見まわした。ちよろど具合よく、大きな柏の葉が落ちていた。

「これは、いいものが見つかつた」と、坊さんは柏の葉を石の上に敷いて、そこに観音さまを置いた。

ところが、しばらく休んでからもう一度観音さまを持ち上げようとしてみても、どうしたわけか観音さまは根つこのはつたみたい、びくりとも動かない。坊さんは、困つた困つた。坊さんは、観音さまをそつとして、そこにお堂を建立した。

やがて、堂を中心だいがらんにたくさんの寺が建ちならぶ大伽藍れいじようの霊場となつた。観音さまの敷きものにつかつた柏の葉——これが柏尾の地名の由来といらう。

柏尾の金鶏



養老町には、柏尾寺にまつわるお話がたくさんあります。その一つを、これから紹介しましょう。

明治三十年ごろの事です。柏尾に安田笹市という人が住んでいました。

ある日のこと、笹市さんは、ちよつとおもしろい話を耳にしました。

『柏尾寺の御堂の跡には梵鐘ぼんしやう（お寺のつり鐘のこと）が埋まっております、一月一日の明け方になると、金の鶏にわとりが鳴く』

というのです。

笹市さんは、ぜひ、自分の目で確かめてみたくなりました。そこで、笹市さんは、さっそく村の人たちを

集め、皆の許しをうけて梵鐘の発掘を始めました。

えっこら、えっこら。だんだん掘り下げて数十尺（約十五メートル程）。けれども、目あての鐘も鶏も、いっこうに出てきません。かわりに、石仏ばかりがごろごろ。とうとう千五百体あまりも出てきました。

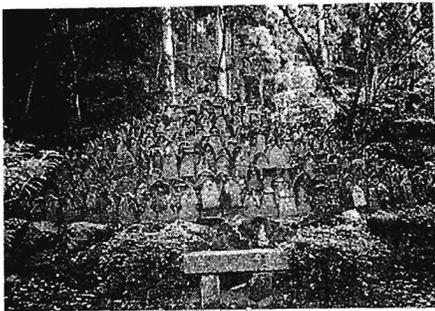
この石仏は、織田信長の時代に焼きうちにされた人々の霊をなぐさめるために、貧しい村人たちが細ぼそと彫ったものらしく、発掘にあたった人たちの涙をさそいました。

「こんな暗い地面の中で、気の毒に。これじゃあ、仏様もうかばれまい。

ここに丘を作り、台座を設けて供養をしてさしあげよう。」

村人たちは、そう話し合い、てあつく供養したということでした。そして、それ以来、二度と金鶏は鳴かなくなつたといひます。

今も、柏尾の山すそに静かに並んでいる千体せんたいぶつ仏は、その時掘り出されたものなのです。



千 体 仏

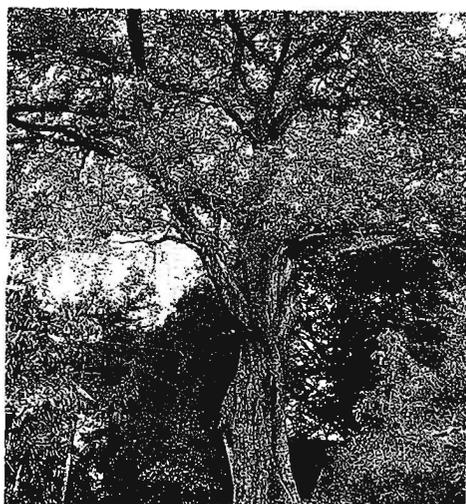
地名の由来(二) 龍泉寺

龍りゅうといえは、体はどでかい蛇うろこに似ていて、全身に鱗うろこをつけるといふ。頭には二本の角がによきとでて、ふだんはおとなしく海や池のなかに住んどるが、気がむくと空をとんで風雲をまきおこしたらしい。むかしから人々は龍を水をつかさどる神様と信じ、大切におまもりしとった。

ところで、このあたりの山のとつぺんには、ちいさな池があつて、不思議なことにひどい日照りがどんなにつづいても、池の水はかれんかつ

た。村人のだれいうともなく、「あの池には、龍がおらっしゃるか
らじゃ」

とうわきするようになり、やがていつしか村名も龍泉寺りゅうせんじとなつていつた。南濃町にある臥龍山がりゅうは、龍泉寺の龍が空をとんだついでに、よく体を休めてねころがつた山だといふ。



天然記念物 ムクの木
龍泉寺 六社神社

庚申待

『庚申』ころしんと読みます。またのよびかたを、かのえさるともいつて、昔からいろいろな言い伝えが残されています。

平安時代に中国から伝わった庚申の教えには次のような話があります。

『人身には三戸さんしあり生命を毒す。』

三戸とは次のようなものです。

上戸・頭に居り視力を減じ毛髪を白

くす。

中戸・腹内に居り五臓を損じる。

下戸・足に居り精を奪う

この三戸の虫が人間の体の中に住んでいて、庚申の日に人が眠ると、天に昇り人間の罪を天帝に告げることにより、寿命が決定されるのとです。

庚申の夜、人がぐっすりと眠ると三戸の虫が、そろりそろりと起き出します。

「よし、よし、なかなかよく眠っている。さっそく天帝様のところに出かけよう。」

「こいつは、本当にどうにもならない悪党だ。天帝様に言いつけてこらしめてやらねば。」

天についた三戸は、



「天帝様に申し上げます。こいつは大変な欲ばりで、人々をだましてはなんでも取り上げてしまします。こいつのために泣かされた人が山のようにいます。」

「何、そんなに悪いことばかりしているのか。そんな奴は生かしておいてもしかたがない。早く死んでもらうことにしよう。」

ということになり、まだ、まだ元気だった人が死ぬことになります。

そこで、このようなめにあわないために、庚申の夜には眠らないようにする必要がおきたのです。

庚申の夜、村中の人々が庚申塔の前に集まってきました。手にはお経の本を持って。ここで一晚中眠らないでお経をあげることにしたのです。みんなで大きな声をはりあげ、お経をとなえていると眠気ねむけもふきとんで

しまいました。これで一安心です。
ところが庚申の日は年に六回もあり
六十一日めぐとにまわつてきました。
人々はお経をあげているだけではつ
まらなくなりまして。お腹もすくし
のどもかわいてきます。ある人は飲
み物を、ある人は食べ物を持ってき
て、みんなで食べたり飲んだりして
いるうちに、歌を歌う人が出てきま
した。踊りを踊る人も出てきました。
庚申の夜はとてにぎやかになり、
まるでお祭のようになったそうです。
そして、庚申の夜は誰も眠らない
風習ふうしゅうが生まれました。この風習のこ
とを『庚申待こうしんまち』といい、今に語りつ



庚申塔

がれているのです。
この養老の地にも庚申塔がありま
す。龍泉寺に住んでいる人たちは知っ
ていることでしょう。龍泉寺にある
大橋昌平さんというおうちの庭に
『庚申』という字がぎざまれた石碑せきひ
が建っています。一度、たずねてお
まいりをしてくるといいですね。

山猫のお六

養老山の奥深くに、立岩たていわ（八畳岩ともいう）という大きな岩があります。その岩の横には、暗い不気味ぶきみなほら穴があり、その昔、山猫のお六という大泥棒おおどろぼうが住んでいました。

お六は、大変な悪党で、金品をうばうだけでなく、時には人の命までもうばってしまふ恐ろしい女でした。毎日のように、里へ下りてきては、多くの家々を荒らしまくりました。時には、はるか大垣のあたりにまでも出かけて行って、盗みを働いたと

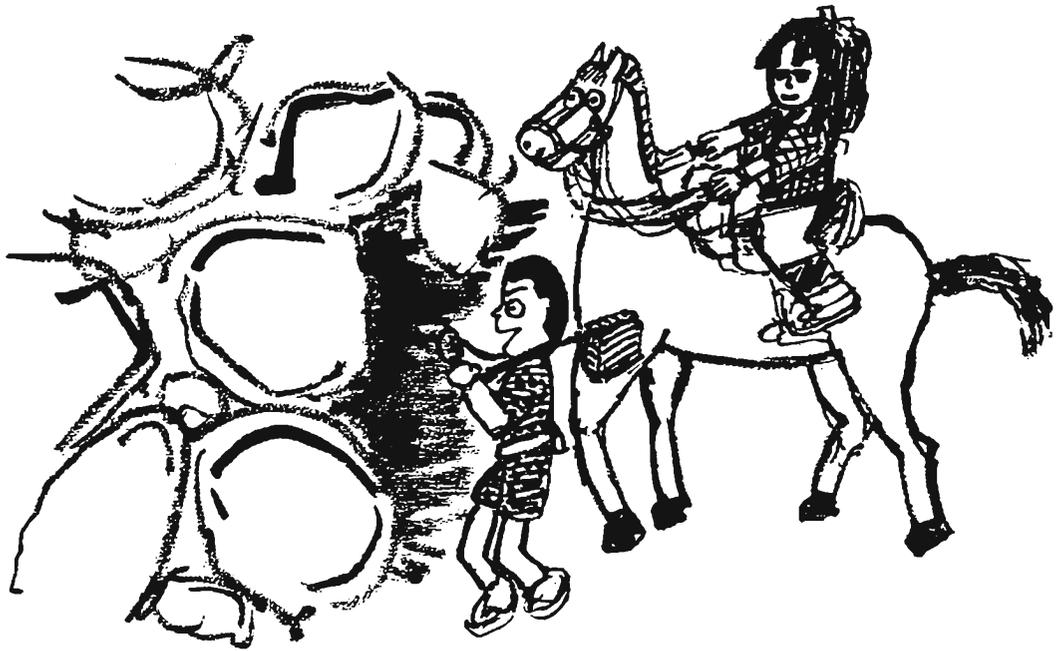
いいます。そして、あとをつけられると、誰であれ、皆殺してしまふのでした。人々は、残忍ざんにんな手口てぐちのお六をおそれ、なんとかとらえる方法はないものかと思いました。しかし、一くせも二くせもあるお六をどうすることもできず、ただ、おそれるばかりでした。

やがて、お六のうわきは、この辺りいったいに広まりました。

そして、ある日、時たま通りかかった豪傑ごうけつ関口弥太郎の耳に入り、「ふとどきな盗人め。けしからん。よし、わしが退治してくれよう。」ということになり、関口弥太郎が立

岩のほら穴まで登り、退治してくれ
たということだ。

いつか、養老山の上の方まで登る
ことがあったら、この立岩を探して
みて下さい。もしかしたら、お六の
くらしの跡が見つかるかもしれませ
んよ。



袖とり宮

今、養老警察署のある場所は誰でも知っています。でも、警察署の裏の道路の北側に神明神社あったことを知る人は、今では少なくなっています。この神明神社しんめいのことを別名『袖とり宮』ともいいます。なぜそんなよび方がされるようになったのでしょうか。実は、昔、昔に不思議なできごとがおき、人々の口から口へと伝えられてきたお話があるのです。

その昔（江戸時代）神明神社のあった前の道路は、大垣から養老へぬけ

る街道かいどうとして、たくさんの人々がいきいきし、大変にぎやかだったそうです。神社の境内けいだいには大きな藤の木が何本もあり、幹がたれ下がったり、はい登ったりして大波のような形をしていました。藤の花の季節になると、それは、それは見事な花が木木からたれ下がり、道ゆく人々の目を楽しませたばかりでなく、暫しの憩いの場にもなりました。この藤の花を見るために遠くから出かけて来る人もあり誰いうともなく『藤の宮』ともよばれるようになったそうです。

また、境内にはその他いろいろの木々が生おい茂もっていて、うっそうとし

ており、子供たちにとってはかっこうの遊び場所になっていました。

子供たちはいつも神社に集まってきたては、夕方暗くなるまで遊びを楽しむのでした。

今日も子供たちの元気な声が藤の木の下から聞こえてきます。

「かごめ、かごめ、かごの中の鳥はいついつ出やる。」

と鬼を囲んで輪になりぐるぐるとまわっているうちに、その輪がだんだん早くなり出しました。その時、輪の中にいた一番年下の太郎が転ころんでわっと泣きだしました。みんなが集まってきてかわるがわる

「太郎、大丈夫。けがはない。」

とのぞきこみます。太郎は泣きじゃくりながらも、しっかりと、

「もう大丈夫。」

と答えたので、また輪になりました。でも、太郎と手をつないだ花子が突
然

「どうしたの太郎、着物の袖がないよ。どこにやったの。」

ときげびました。確かに太郎の着物の袖がないのです。子供たちは神社の中をくまなく探しましたが袖はとうとう出てきませんでした。本当に袖はこつ然と消えてしまったのです。そんなことがあってからしばらく

たったある日、子供たちは今日も遊
びに夢中^{むちゆう}で、太郎の着物の袖がなく
なったことはいつのまにか忘れてい
ました。仲良く鬼ごっこをして遊ん
でいます。鬼になったきよ子が一郎
を追いかけているうちに、木の根に
つまずいて転んでしまいました。す
るとどうしたことでしよう。起き上
がったきよ子の着物の袖がなくなっ
ているのです。

こんなことが二度、三度と続くら
ちに人々の間では、神明神社で転ぶ
と袖を取られるという話が、まこと
しとやかに伝わり出しました。そし
ていつのまにか神明神社のことを

『袖とり宮』とよぶようになりまし
た。

なぜ袖を取られるのか、袖はどこ
へいつてしまうのか、未だ^{いま}に本当の
ところは謎^{なぞ}につつまれたままです。



地名の由来（三） 明德

京都に、金閣というお寺があるのを知っているだろうか。昔、これを別荘として建てられたのが、足利義満あしかがよしみつという將軍。

その將軍が、一度名高い養老の滝を見てみようとおもいたって、この地を通られた。それが明德四年（一三九三）のことだったから、村名も明德になったという。



明德船着神社

専念寺の阿あ弥み陀だ像



高田という町は、元もとは、今の所より北東の低い土地にあったそうです。たび重かさなる水害のため、土地の高い今の所へ、一六〇一年頃移ころうつりました。

専念寺もまた、高田の町と一緒に今の所に移ったのですが、四百年ほど前は、今の下高田あたりにあったのだそうです。

今は、残っていませんが、専念寺池という、わりと大きな池もありました。

その頃のことでしょうか。後光ごこうのさしている田んぼがあったそうです。それと同時に、ある人の夢枕まくらに、

あみだ様が現れて、専念寺へ連れて行ってほしいというおつげがありました。

それでは、ということになり、後光のさしているところをさぐってみると、あみだ様が出てきました。六十センチばかりある、金色に輝くりっぱなあみだ様です。そして、おつげの通り、専念寺にお祭りしたということでした。

このあみだ像は、今も大切にお祭りしてあって、お正月とお彼岸とお盆には、皆さんも拝むことができますよ。



専念寺 阿弥陀像

姥石

泉町（字枯木）に、莊福寺というお寺がありました。

その御堂の近くの松の木の下に、ひとかかえくらしいもある、黒っぽい石があります。その石の頭のところは、刀で割られたように鋭くなっています。

この石は、姥石とも姥切石ともよばれて、一三九二年ごろのこんな話がつたえられています。

むかし、むかし、あるところに、

おじいさんとおばあさんが、すんでいました。

二人は なかよく いたわりあつて くらしていました。ところが、ある日、石のそばでおばあさんが、なくなつてしまいました。

それからというもの、夜になると、石が一晩中、うなるような すすり泣くような なんとも奇妙な音を出すようになりました。それに、音を出している間、石なのに人のように温かくなるのです。あたりの人々は、たいへんこわがりました。

石のあつたこのお寺に、京都から来た、正徹というお坊さまが住んで



いました。

このお坊さまは、石が温かいので、おじいさんに会いたいと強く願ったあよの世のおばあさんのたましいが、この石にのりうつたのだらうと考えました。

そこで、お坊さまは、

(おふち＝おじいさん(会う))

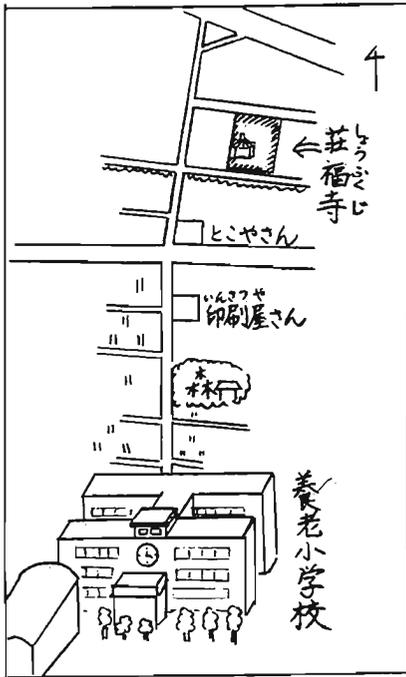
おふちにはあふことかたき姥石うばいしの

さ(肌)こそはたへのつめた(冷)かるらん

(おじいさんに会えないおばあさんの石。石ならば、肌はだもつめたく、冷ひえきっているはずだ。)と石に言い聞かせて、刀を抜き、石に向むかって、「迷まよわず、成じょうぶつ仏しなさい。」と、一ひと刀あびせました。

それから、姥石が温かくなることも、声を出すこともなくなったということでした。

莊福寺は、牧田川改修工事のため、一九三四年（昭和九年）に高田の大正町に移されました。養老小学校からも近いので、一度、見に行ってください。



石 姥 寺 福 莊

地名の由来（四） 五日市

昔、ここらは濃州三湊（みなと鳥江、栗笠、船附）と牧田宿との中間点として、えらいにぎわいをみせていた。

人でにぎわえば、いろんな品が集まり、市場でやりとりがはじまる。それが、毎月一回、五日の日と決められておった。その五日市場といった名残りが、地名になったらしい。

全国に似たようなところはいくつかあって、たとえば四日市、七日市、八日市……みんな五日市の親せきとあったところか。



五日市 八幡神社

沢田の久々くく美雄みお彦ひこ神社

沢田本郷の下手しもてを少し登った山の中に、久々美雄彦神社のお社やしらがあります。沢田の氏神様という事です。沢田の氏神様という事です。いろいろな調べていくうちに、歴史のロマンがみえてきたのです。

少しむずかしくなりますが、皆さんも一緒に歴史を楽しみましょう。あと六年で二〇〇〇年ということをお頭に置いて読んでください。

まず、久々美雄彦神社が、いつ、どういう風に建てられたのか、です。実は、沢田の方に聞いたり、古文こもん

書しょを調べたりしたのですが、結局、分かりませんでした。

分かってしていることは、朝廷で作られた延喜式えんぎしき（九〇五年～九二七年作成）という本に出てくるところからです。この本の作られたころ、全国の神様に位くらいを授けるさずことが、しきりに行われ始めました。これは、神社を国と同じように統一しようとしたものでしょう。このあたりでは、三神の多岐神社たぎ、沢田の久々美雄彦神社、金屋の御井神社みいの三つが載っています。

久々美雄彦神社のことが、『続日しよくに本後記ほんこうき』の八三八年のページに出て

います。美濃地方では、八三六年に位を授けられた神様の次に古いものです。



沢田神社 久々美雄彦

さて、ここで久々美雄彦神社がいつごろ建てられたのか推理してみましよう。次の事実から考えてください。

①延喜式（九〇五年～九二七年）に出てくる。

②続日本後記によると、八三八年に位が授けられた。

③このあたりで一番大きい多岐神社は、七〇八年にたぎ氏の氏神様として建てられたことが分かっている。

④久々美雄彦神社のご神体（お祭りしてあるもの）は、四十五センチくらいの木像である。（衣に冠をつけたお姿で、神社に木像をお祭りして

あることは、神仏一体であったころのなごりでしょう。今はもう、たいへん古くなってしまいました。）

（神社について、つけたします。日本は、神様の国といわれ、大昔からどの村にも神社が祭られてきました。祭つてある神様は、国を創つたといわれる、神話に出てくる神様や、石や鏡などの自然の物、りっぱな人物、自分たちの祖先などいろいろです。）

仏教が伝えられると神様と仏教の仏様は、一体と考えられて、一緒に大切に祭りされました。）

⑤ 養老山地の多くの古墳ができた、一〇〇〇〜二〇〇〇年ころは、字も本もなく、記録が残っていない。しかし、古墳を作るくらい栄えた人々がいた。

⑥ 六〇七年、法隆寺が建てられ、仏教が日本に定着しつつあることを示している。

分かつているのはこれだけで、多岐神社と比べても、同じころにできたのか、その前からあったのか、その後から出来たのか、想像することしかできませんが、今から千年以上前から、沢田の守り神として敬うやまわられてきたことは、まちがいありません。

もう少し、久々美雄彦神社のこと

久々美雄彦神社はいつできたか？

⑤ 古墳ができる。



⑥ 法隆寺ができ、仏教の定着を示す。

④ 二神体は、木像で神仏一体のたごりか？

③ 多岐神社ができる。

② 純日本後記の八三八年のところにでてくる。

① 延喜式にでてくる。



を調べてみましょう。

『美濃明細記』には、「一の瀬邑、同名の社あり。」と記されています。

しかし、一ノ瀬の神社は長彦神社であり、この説は誤りという見方もあります。また、久々美雄彦神社に伝わる古文書にも移転の事は、載っていません。

一五一五年の古文書には、「天戸邊尊分神久々見穂彦大明神（昔の神様は名前をいろいろ持っていた。）」と書いてあります。「天戸邊尊」や「久々美雄彦」がどういう神様かは、神様の戸籍の本に載っていないので、まったく分かりません。

一六四七年の古文書には、関ヶ原の戦い（一六〇〇年）の頃、殿様から健康を祈って田んぼをいただいたことが載っています。

どちらの古文書も、神主さんが書き残したもので、このころ、神主さんがいたことが分かります。

久々美雄彦神社は、郷社（府・県・社の下、村社の上）ということですが、これだけの由緒ゆいしよが残っていることから、いかにこの神社が大切に祭りされてきたかということが、分かります。

では、なぜ沢田にこのように歴史の古い神社があるのでしょうか。

伊勢街道や九里半街道、桑名街道が沢田を通っていたのです。

ヤマトタケルのミコトも通ったと伝えられる伊勢街道（今の東海自然歩道）は、六七二年には壬申の乱の軍兵が、七一七・七四〇年には、元正・聖武天皇が、一五六〇年ごろには、織田信長の軍勢も通ったでしょう。

また、九里半街道は、一五八七（ごろから栄えた川の湊みなと（烏江・栗笠・船附）を利用して牧田川を行き来する荷物と一緒に、多くの人々が通りました。

ですから、沢田には、旅人のため



ヤマトタケル伝承地・行幸街道の略図

の宿屋など、いろいろなお店がありました。鉄砲屋もあり、家も百三十〜百四十けんもあって、大変栄えました。

ヤマトタケルのミコトが伊吹山の神様をたいじしようとした話が伝わっていますね。久々美雄彦神社に、

「この沢田の地区南に養老山、北に伊吹山を望む位置にあることから祭神は伊富いぶき伎神社と同神の多々美比古命とする説がある。」と記されています。

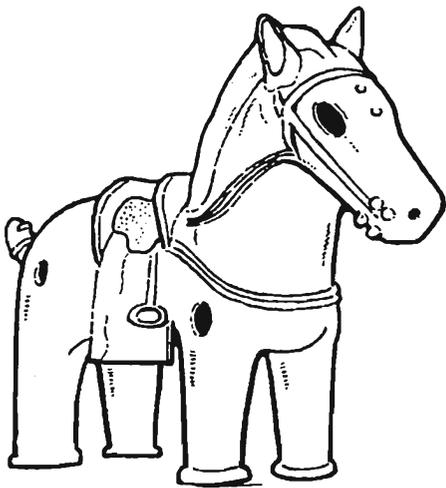
昔の神様は、名前をいくつか持っていたので、考えられないことではありません。伊富伎神社は、鉄に関

係があると考えられています。隣の桜井にヤマトタケルのミコトを祭る白鳥神社があることを考えると、大昔、朝廷に対抗できるくらいに、豪族が沢田にもいたのではないかと考えられます。

また、伊富伎神社は、農耕の神様でもあります。古文書の「久々見穂彦大明」を見ると、沢田の神様も農耕に関係があるのかなと思います。

もう一つ。岐阜に『久久利の宮』の伝説があります。「久久利」というのは、水がわき出ることで、沢田の「沢」に通じるのではないでしょうか。

このように想像するしかないのですが、古代の足あとが見えかくれする沢田に、そして養老町に歴史のロマンを感じ取ってほしいと思います。



大和朝廷の大王や豪族たちが大きな力を持つてくると、その力を示すため、大きなお墓をつくるようになりました。三世紀末ごろから八世紀にかけてつくられた、この大きなお墓は古墳と呼ばれています。

勢至せいしの鉄座てつざ

勢至には「勢至千軒、寺三ヶ寺」

という言葉が残っています。この言葉の意味は、言うまでもなく「勢至には、千軒も家が建ち並び、お寺が三つもある。」ということですよ。

千軒という言葉は、そのまま信じることはできないにしても、大変なにぎわいを見せていたことがうかがわれます。今の勢至には、家は二十数軒ほどしかありません。本当に昔はこの言葉どおりの町だったのでしゅうか。

永い間、このことが疑問に思われてきたのですが、玉井文書たまいもんじょ（福岡県久留米市くるとめの球井家に伝わっていた古い文書）の発見によって勢至が、大変な商工業の町であったことがわかってきたのです。

その文書には、勢至に「鉄座」があったということが書いてありました。「座」というのは、昔力のあった人や寺や神社に頼んで、商品を作ったり、売ったりすることを他の物にやらせず、自分たちだけでできるようにする権利を持った組合のことです。つまり、勢至には鉄製品を作ったり売ったりすることのできる組合

があつたといふことなのです。

鉄は、わたしたちの生活にとって欠かせないとても大切なものです。ちよつと気をつけて身の回りを見てみると、鉄でできたものがいたるところに見つかるはずで。今でこそ簡単に手に入る鉄ですが、昔はとても貴重品きちょうひんでした。

数百年ほど前、日本は戦国時代といつて各地で有力者どうしの戦争が絶えない大変な時代でした。戦争の時には、大量の武器がいます。刀や槍、そして鉄砲てっぽうも鉄でできていることを考えると当時の有力者たちがいかに鉄を求めていたかといふこと

が分かります

従つて、この地方の支配者が変わるたびに、玉井氏たまいし（鉄座を治めたと考えられる）に対して鉄座をもつてあげようという約束をした書き付けが何枚も送られています。その中には、あの有名な織田信長のものも含まれています。

ところで、昔の川は大変重要な物資ぶつしの輸送路ゆそうろでありました。今の津屋川からはちよつと想像できませんが昔の津屋川は、沢田、桜井、上方、龍泉寺、勢至、石畑、明德、鷲之巢、小倉と養老山麓さんろくを流れ、揖斐川に合流していたと考えられており、この

川を利用して多くの荷物が輸送されてきたという事です。また、勢至は、京都、北国、伊勢を結ぶ昔の重要な街道沿いになりました。こうした交通の重要な地点であるとともに鉄座があったということから、昔から大変に栄えてきたのです。

しかし、「勢至千軒」といわれたこの土地も、天和三年（一六八三）には、わずか八軒になってしまいました。どうしてこんなに急激に衰えていったのでしょうか。

十七世紀になると、戦国時代といわれる時代が終り、日本は太平の世の中へと移っていきました。そんな

中で、武器をそんなに必要としなくなったことは言うまでもありません。むしろ、危険なものとしてその製造や販売が厳しく見張られるようになりました。また、重要な輸送経路であった津屋川に、地震や洪水によって、養老山脈から多量の土砂が流れこみ、大きな船が通れなくなってしまうました。こうした、時代の流れや、自然現象などによって、勢至は、急速に衰えていってしまったのです。現在でも、勢至には、鍛冶町、町屋等の地名が残り、当時の繁栄ぶりがかすかにうかがうことができます。

勢至の二つ火

むかし、むかし。まだ、多くの人が着物姿で暮らしていた、明治のころのことです。

勢至村に、とても仲の良い巡査じゅんさ夫婦が住んでいました。この夫婦は、たいそう働き者で、村人のために、毎日せつせと見回りをしておりました。

今日も、いつもの様に、村中を監視かんししながら歩いてみると、巡査の耳に、こんな話が聞こえてきました。「おい、悟作さんこのばあさんが、

ゆんべ急になくなったんだと。それが、あれのせいだつていうぞ。」
「おれも聞いた、聞いた。あれを見ちゃおしめえだつて言うのは、やっぱり本当だったんだなあ。ぶる、ぶる……。」

額をよせながら、村人たちが、何やら妙な話をしていきます。
「はて、何の話だろう。あれというのは、なんのことなんだ。毎日、村を見て回っているが、そんな恐ろしい物なぞ、見たことないが……。」
巡査は、不思議に思ってたずねました。

「これ、これ。何をそんなにぶるっ

ておるんだ？わしが一つ、力になろう。あれというのは、何の事だ。」
巡査がたずねると、ひとりの村人が、おそろおそろ話し出しました。

「だんな、人玉たましいって知ってますかね。あの、死んだ人間の魂たましいがもえるっていう、青白い火の玉のことですかね。実は、その人玉が、この辺りにも毎晩出るんです。たいてい千駄地蔵さんの辺りから浮かび出て、勢至村へ飛び、龍泉寺・柏尾・津屋へと、焼き払われた多芸七坊のあった村々を巡って消えるらしいんですがね、この人玉みうちを見てしまうと、必ず身内に死人が出るっ

ていうんで、皆こわくて、こわくて。ついゆんべも、ひとり、そのせいで死人が出たんですよ。」
話し終わった村人が、青い顔をしながら巡査の方を見つめると、巡査は、けらけらと笑い出し、

「そんな馬鹿なことがあるものか。よし、わしが本当かどうか確かめてやる。」

と言って、その晩から監視に立つことになりました。

監視を始めて一・二週間は、人玉の火の字も目にすることはありません。巡査は、
「ほうれ、みる。やっぱり、そんな

事があるもんか。」

と思いました。

しかし、ある夜、とうとう人玉を見てしまった巡査は、万が一にもそんなことはないと思いつながら、一もくさんに家へと足を急がせました。

すると、どうでしょう。家では、今朝までびんぴんしていた奥さんが、急病で苦しんでいるではありませんか。巡査は、一生けん命手をつくし、看病をしました。けれど、奥さんの病気はついに治らず、あくる朝、帰らぬ人となってしまったという事です。

世に、これを『勢至の二つ火』と

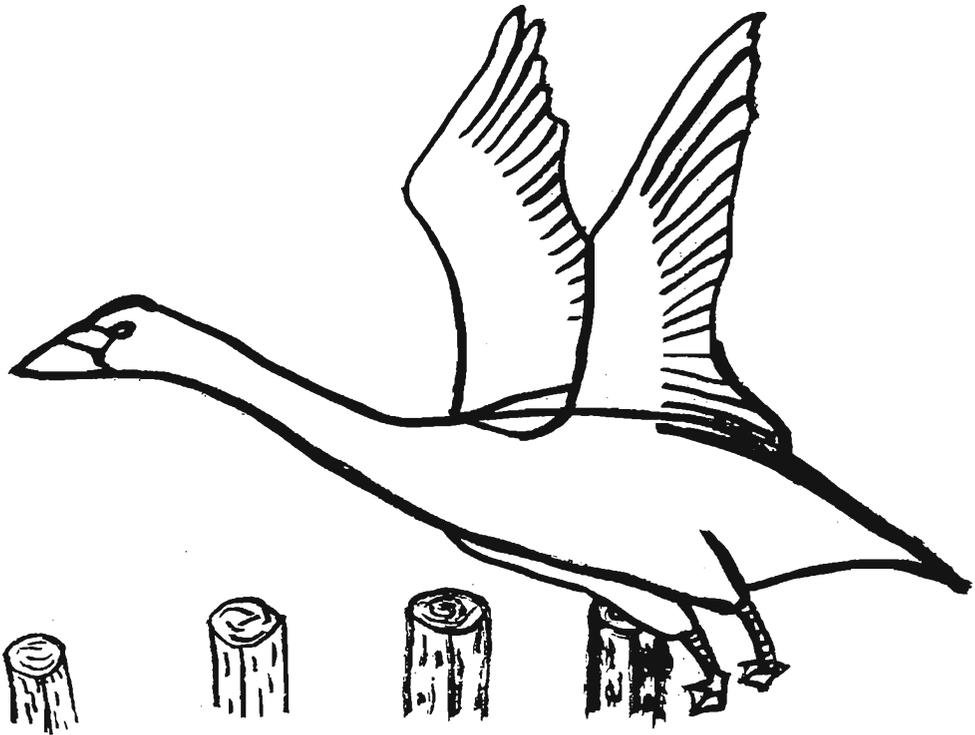
いって、長らく人々の間で語り伝えられたという話です。



上方 しらとり 白鳥神社の神宿 かみやど

東海自然歩道を歩き上方までくると、白鳥神社へとつづく立派な石造りの階段に出会います。白鳥神社は やまとたけるのみこと 日本武尊をお祭りしています。

日本武尊は、はるかむかしの英雄で、伊吹山の神様と戦われたとき病にかかり、故郷大和に帰る途中この辺りを通られたのだそうです。通られた場所には、尊にまつわる地名がたくさん残っています。養老町付近の古い地名「多芸」たぎもその一つで、「わたしの足は、たぎたぎしく（よ



ろよろに) なってしまった」と言われたところから付けられました。また桜井もそこにあつた泉で喉のどの渴かわきをいやされたとき、桜のような良い香りがしたところから付けられました。しかし、伊勢いせの能褒野のほのでついに お亡くなりになり葬られました。

その時、尊みことの魂が白鳥になって飛び立ったという伝説があります。白鳥神社の名もその伝説から付けられたものでしょう。従つて氏子は、全ての白い鳥を大変大切にし、食べることはもちろんなく、一切の器具にも白い鳥の羽根を使わないとされています。いつ頃この神社が建てられました

かということについては、残念なことに記録が失われてしまつていてよく分かりませんが、「美濃国みののくに神明帳しんめいぢょう」という千年以上前の記録にその名が見られることから、それ以前からあつたことは確かです。

この白鳥神社では「神宿」と言われる大変めずらしい風習が今もなお厳格げんかくに守られています。神宿にあつた家では、神様が宿るとされている鰐わにぐち口を家の中にお祭りし、一年間の神社の儀式の準備を行い、一心に神様に奉仕ほうしするものとされています。神宿は、毎年十一月十八日に「玉ころおみくじ」によつて選ばれます。

当たった者は、十一月二九日に神移しの儀式ぎしきを行います。村人が寝静まる頃、神社の鍵かぎ、鏡、剣などの道具を新神宿に移し、いよいよ午前二時ごろ鰐口を前年の神宿から受け取ります。鰐口は、直径四〇cm位でそんなに大きいものではありませんが、以前神宿に当たった人に聞くとだれもが「米一俵ぐらいの重さ（六〇kg）に感じられ、無事に家まで歩いてたどりつけるか心配だった。」と語ります。どうしてこの鰐口に神様が宿ると考えられるようになったかということについてこんな話が残っています。以前は社殿つるに吊つるされています。

てそれを鳴らし、お参りしていたのですが、ある時、盗人がこれを盗みだしました。ところが、牛谷付近まで来ると急に歩けなくなってしまいました。盗人は、大いに驚き、一生懸命神様に許してもらえよう願ったところ、ようやく歩けるようになってたそうです。これを聞いた村人は鰐口こそ神が宿るものと考えようになったということです。

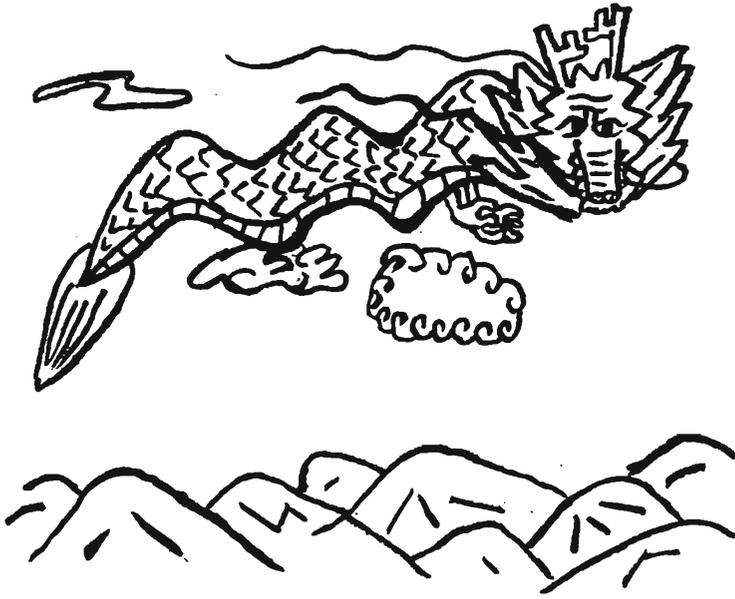
さて、神宿に当たると大変な準備をしたり、様々なしきたりを守ったりしなければなりません。まず神移しの儀式までに屋根を修理します。これは神様がお移りになったあとで

雨もりなどの修理のために、人が屋根に登るのは、大変失礼に当たると考えられるからです。また、神宿に当たった一年間に自分の家はもちろん、親戚や上方に出産や葬式などがあると、それを聞いた日から三日間は、家族の者とは別の火で煮炊きしたものを食べなければなりません。これを別火（べっか・べっぴ）と言います。正月はもつと大変で、大晦日の午後になると水を被って身を清め、三日間座敷にこもります。この間一切しゃべってはいけないとされています。この三日間は家族の者でも座敷に入るとは許されませんから当

然別火によって食事をとることになります。元旦には午前二時ごろにやはり水を被って身を清め、神社に行き、門松の上にわらで作られた「ほうかつぶ」とよばれる台にもちとぼらの肉を二切れずつ供えます。これを朝、昼、晩の三回、三日間続けなければなりません。

こうした厳しいしきたりを上方の氏子たちは、大変な誇りとして二百年以上にわたって守り続けてきました。

養老山の龍のお遊び



『龍』^{りゅう}は伝説の生き物として有名です。でも、本当の姿を見た人はいません。中国では、龍のことを次のように語り伝えていきます。

空想上の生き物

角と鋭いつめをもつ巨大なへび
水と天に深くかかわっている

不思議な力をもっている

この龍にまつわるお話が、ここ養老の地、竜泉寺にも伝えられています。

昔、昔、遠い昔のある暑い夏の日のことです。くる日もくる日も雨の降らない日が続きました。人々は、かんかんと照りつける太陽を見上げ

ため息をつきながら、

「水が欲しいなあ。」

「少しでもいいから降ってくれないかなあ。」

といいあいしました。すると長老の一人が、

「私が小さいころに聞いた話じゃが、じつは、この竜泉寺にある養老山の頂上に小さな池があつてのう。そこに龍が住んでいるそうじゃ。ひでりの時にもこの池の水だけはなくならないそうじゃ。みんな水をくみにいこう。」

と言い出しました。村の人々は、龍が恐くてすぐには出かけられません

でしたが、どうしても水が欲しくてたまりません。そこで、村でも一番勇気のある若者が出かけることになりました。村の人々の見送りをうけ若者はやっとの思いで頂上にたどり着きました。するとどうでしょう。

池には水がなみなみと溢れているではありませんか。でも、どこをどう捜しても龍の姿は見あたりませんでした。安心した若者はたつぷりと水をくむと村へと帰りました。その後も村人たちは、次々と水をくみに出かけて行きました。こんなことがあつてから、竜泉寺の人たちが気をつけて山頂を見ていると不思議なことが

おこりました。今にも雨が降り出しそうな日には、山頂に一番に雨雲がかかり、龍の住む池のあたりから雨が降り出しました。そして、雨雲は、南へ南へと動き、養老町を通りこし、南濃町にある行基寺ぎょうきじというお寺の裏山までたどり着くと、ぴたりと止まりました。それと同時に雨もやんでしまうのです。ところが、またしばらくすると行基寺に雨雲がかかり雨が降り出し、養老町の方へと動いてくるのです。じっと見ていると、池のあたりに雨雲が止まり雨もやんでしまいました。

こんなことが続くうちに、人々は

やはりあの池には龍が住んでいるのだと噂をするようになりました。そして、龍が養老山頂づたいに南の行基寺の裏山まで遊びに出かけていくのではないかとささやき合いました。

このお話は、『養老山の龍のお遊び』として、後々の世まで伝えられてきました。南濃町にある行基寺の縁起えんぎにも記されています。

京ヶ脇の口碑・伝説

一 堂の庭

現在は山林でありまして、平であります。ちようど、屋敷形をしています。元旦の朝、「金鶏が鳴くげな。」と死んだ作兵衛という者が言ったと、せがれの松次郎が言っていました。しかし、誰もその鳴声を聞いたという者はありません。

二 馬場

多右衛門という財産家の乗馬場であつたといひます。

三 多右衛門屋敷

現在は、畑になっています。昔は舟付まで他人の土地を踏まずしてつけたという位の財産家であつたといひます。

四 木戸口

ただ今でも、私の方は猪が出て畑作物は稲などを荒しまして、まことに困りますが、昔もたいそう猪が出たそうです。それで田畑の周囲に掘を掘り、垣根を作り、三、四ヶ所に出入口を作り、朝は開けに、晩は閉ぢに廻番で行つたのであるそうです。それで木戸口という名がついたそうです。そうすれば、木戸口が三、四ヶ所あるわけですが、ただ今、木戸

口の名の残っているのは一か所だけです。

五 ウソ谷

昔、京にしようとして、嘘をいっただから此名が付いたと申します。

私の方のある者が、いつぞやどこかで宿った時、宿帳を付けたら、宿の主人が、「ミヤコという京の字ですか。それは、お珍しいことです。京という字の付くような所は日本中にも、いくつもありますまい。」といったというておりました。

六 ガンドウ谷

これは、理由はわかりませんが、昔は（四、五十年前）牛や馬が死に

ますと、この谷へ捨てに行つたのだそうです。すると業者が来て皮をはぎ、肉を取り、その他は捨てていっただけです。ただ今では見ませんが私の子供の時に骨はときどき見ました。

京ヶ脇には直江の蓮光寺の門徒が八、九軒あります。数年前、寺の天井を修理しました大工の話によりますと、棟木に書いてあった年号を調べましたが百七、八十年前に建つたものと思う。と申していましたが少なくとも京ヶ脇が出来たのは二百年より新しいことはありません。



15
7

 養老町立図書館
☎0584-32-1281



0120095724